

C. オルフの音楽教育理念に基づく 幼児のリズム指導について

—「音楽リズム」における実践のために—

村山 淳子

はじめに

C. オルフの音楽教育が日本に紹介されて、すでに20年余りが経過しようとしている。その間、我が国の音楽教育界では、理論、実践の両面から研究が進められ、それらの研究成果も発表されてきている。

しかし、オルフの音楽教育においても同様であるが、外国から紹介される「メソッド」「システム」などと呼ばれるものは、日本の学校教育の中でどのように位置付け、授業の中で生かしていくか、という、実際の指導法の研究部分で、足踏み状態となりやすい。

そこで、本論文では、幼稚園における「音楽リズム」の領域におけるリズム指導のあり方を研究するために、オルフの音楽教育理念の適合性を明らかにし、さらに、保育実践の中で、体系化を試みようとするものである。

I C. オルフの音楽と音楽教育理念

1 C. オルフについて

カール・オルフ (Carl Orff, 1895~1983)は、現代ドイツの代表的な作曲家であるとともに、すぐれた音楽教育者としてその功績を残した。彼の作品および経歴を背景として、その音楽と音楽教育の理念を明らかにしてみたい。

幼少の頃より、ピアノの即興演奏や言葉による即興表現を得意としたオルフは、独学で作曲の勉強を始め、19歳でミュンヘン高等音楽学校を卒業した後、ミュンヘン、マンハイムなどの歌劇場の指揮者を歴任した。

彼の興味の中心は、劇音楽に向けられており、その主要作品は、ほとんどすべて、オペラおよび舞台をともし作品である。最も有名な作品は、舞台つきのカンタータ「カルミナ・ブラーナ (Carmina Brana) 1937年」であり、後の、「カトゥリ・カルミナ (Catuli Carmina) 1943年」、 「アフロディテの勝利 (Trionfo di Afrodite) 1953年」と合わせて、3部作となっている。

彼の音楽の基調は、音楽、言語、動作（特に舞踊的要素）という三つの基本的要素の完全な合一をめざしているところにある。これは、ギリシア古典劇の伝統をひいている。今日、一般に使われている音楽 (Music) という言葉は、ギリシア語のムーシケ (Mousiké) に由来している。この Mousiké が、音芸術、詩芸術、舞踊芸術を包括した総合芸術を意味する点で、彼の音楽の根底に流れるものには、共通性が見出されるのである。

さらに、彼の原始主義への接近は、リズムの重視を生み、単純な和声構造、オスティナート、ボルドゥン、リズムやメロディーの繰り返しとその構成の原理となっている。このような様式は、後述の「Musik für Kinder」にも、一貫して用いられ、彼の教育理念と深く関係している。

彼が、音楽教育者として出発したのは、1924年に、ドロテー・ギンター(Dorothee Günther)と共に、体操・音楽・ダンスを総合的に教える「ギンター学校」を設立した時である。1920年代のヨーロッパでは、体育がさかんになり、ドイツでも各地に体操とダンスの学校が次々に設立された。リズムと運動感覚とを結びつけたリズム教育の実践を提唱したダルクローズ(Emile Jaques-Dalcroze, 1865~1950)は、当時の新しい運動の積極的な推進者であり、オルフも、ダルクローズの教育法(Eurythmics)に興味を持ち、実践をしたのである。

オルフは、この時、音楽教育の基本にリズムを置くことを決め、音楽と運動を結びつけたリズム教育の新しい理想を実現しようと試みた。彼がリズムを指導の基本に置いたのは、劇場での仕事を通して、オペラ歌手、俳優、舞踊家すべてにリズム教育が欠けていることを痛感したからである。つまり、彼らには、譜面からリズムを読み取ることはできても、からだの中からわき出る生きたリズム感が欠けていたのである。

ギンター学校で、彼は、いわゆる「オルフ楽器」といわれる楽器を考案した。^{註1)}

まず、「なるべく簡単に、生徒たちが、歌ったり、身体を動かしたりしながら演奏できる」ことをめざした打楽器を取り入れ、さらに、メロディ楽器にも工夫を凝らした。このメロディ楽器は、従来のシロフォン、メタロフォン、グロッケンシュピールなどであるが、^{註2)}響板に工夫を施し、さらに、必要に応じて音板を取りはずすことができるため、操作ししやすいものとなっている。

ギンター学校での指導を、彼の音楽教育活動の創始期とみるならば、第二次大戦後の活動を、発展期とみることができよう。

戦争により、学校を失ったオルフは、しばらく作曲活動を中心に行っていたのであるが、1948年、ババリア放送からの依頼により、戦前の彼の音楽教育を、ラジオ放送の子供番組を通して行う

ことになった。この放送は、5年間続き、1950年から1954年にかけて、「Orff Schulwerk—Musik für Kinder (子どものための音楽) 5巻」が出版されたのである。

彼は、この時、ギンター学校での反省から、「リズム教育は、思春期を過ぎたおとなになってからでは遅い。子どもの時からやらなければだめだ。」ということに気づき、子どもの音楽教育における基礎づくりに重点を置くようになった。そして、彼の音楽教育理念の核として、従来の、音楽と運動を結びつけたリズム教育に、さらに、「言葉」の必要性を打ち出したのである。つまり、「言葉」のリズムを入れた指導を取り入れたのである。「言葉」によるリズム指導の大切さを、オルフは、「シュールヴェルク第1巻」の中で、次のように述べている。

「すべての音楽の練習の開始においては、リズムに関することも、メロディーに関することも、話し方の練習に根ざしている。^{註3)}

2 シュールヴェルクの教育的意義

オルフの「シュールヴェルク」は、「Musik für Kinder」全5巻と、「Jugend musik」から成っている。

「Musik für Kinder」の内容から、この作品のもつ教育的意義を探ってみたい。

第1巻は、3部(詩と遊びの歌、リズム練習とメロディー練習、器楽曲)からなり、前述したように、オルフの教育理念の一つである「言葉」や、あそび歌によるリズム練習から出発している。これらの練習曲は、2音による呼び声メロディーから始まり、1音ずつ拡大され、5音音階(Fünftonraum)に達する。この段階では、子どもにとって、最も自分の表現がしやすいようにとの配慮から、5音の範囲に限られている。

ここで、「シュールヴェルク第1巻」の作品の中の例をあげてみよう。

C. オルフの音楽教育理念に基づく幼児のリズム指導について

表1 Musik für Kinder の内容

I. Im Fünftonraum 1. Reime und Spiellieder 2. Rhythmisch—melodische Übung 3. Spielstücke
II. Dur : Bordun—Stufen 1. Bordun (mit sechs Tönen, mit sieben Tönen.) 2. Stufen (Die erste und die zweite Stufe. Die erste und sechste Stufe.)
III. Dur : Dominanten (Die fünfte Stufe, Andere Tonarten, Die vierte Stufe, Mit Septen und Nonen.)
IV. Moll : Bordun—Stufen 1. Bordun (Aeolisch, Dorisch, Phrygisch) 2. Stufen (Die erste und die siebente Stufe, Die erste und dritte, und andere Stufen.)
V. Moll : Dominanten (Die fünfte Stufe ohne Leitton, Die fünfte Stufe mit Leitton, Die vierte Stufe, zum Beschluß) Rhythmisch—melodische Übung (II) (Rhythmen zum Ausarbeiten, Zwei Tänze, Sprechstücke, Rezitativ) Finale

楽譜1 1. Kuckuck



楽譜2 4^a Lirum Iarum Löffelstiel



楽譜3 12. Ist ein Mann in Brunnen gfalln



第2巻では、伴奏型に Bordun と Stufen を用い、単純な多声音楽を子どもたちに無理なく作り出せるように配慮している。音は7音まで拡大される。

第3巻では、4度、7度、9度音程があらわ

れ、他の調も扱っている。オルフ楽器の特性を生かして、木琴や鉄琴の音板を置き換えることにより、新しい調への発展は、容易である。ここでは、ドミナントが導入され、それによって、機能と和声の領域へと導かれるが、練習過程において、和声的なものを用いるよりも、対旋律的なバスの動きに注意するという方法をとっている。

第4巻、第5巻は、短調に基づき、教会旋法が用いられ、ドミナントが導入される。Sprechchor や Rezitativ を伴う作品も見られる。

これら5巻からなる作品については、純粋な器楽曲として受けとめるのではなく、教育用作品として取り扱うことが大切である。この作品を演奏することにより、楽器を使い、「言葉」を使い、「動き」のリズムを伴ったアンサンブルが可能である。また、「言葉 (Sprache) や「動き (Bewegung)」を伴う活動によって、子どもたちの内面的な音楽をよびさますことは、オルフのいうところの「エレメンタールな音楽」の中の大切な要素である。

「Musik für Kinde」で使われている「言葉」は、ローカル色の強いものであり、ギリシア神話にまつわるものや、叫び声、意味をもたないようなものまで使われている。それらは、メロディックな歌以前のもの、つまり、「語り」から出発しているのである。

また、使用される楽器は、子どもが使いこなせる楽器、つまり、一つの道具として扱われている。それらは、作られる音ではなく、作る音をねらったものであり、音楽作りがしやすくなっている。身体を楽器の一部として用いることは、音楽に対して身体で反応することであり、動きのあるリズム教育を考えると、考案されたオルフ楽器とともに、意義深いものである。

音楽の様式の面からみると、オスティナート、ポルドゥーンなど、古い様式を一貫して用い、メロディーやリズムを繰り返すことにより、その音楽を強く印象づけている。また、即興演奏を用い

ていることは、子どもの創造性を伸ばすために、大きな役割を果たすものである。

ここに、オルフが、我々に大きな示唆を与えてくれるところのことばをあげておこう。

「子どものための音楽目的は、すべての子どもたちの音楽の水準の向上にあります。私のやっていることは一つの試みですから、それを参考にして日本のものを作りあげていただきたいと思いま^{註4)}す。」

Musik für Kinder は、ドイツの子どもたちのために書かれたものである。したがって、オルフの言うように、この教育作品は、日本の音楽教育界にとって、日本の子どもたちのための音楽教育を見直すための、一つのきっかけになったともいえよう。

II C. オルフの教育理念に基づく幼児のリズム指導

これまでに、オルフの音楽教育について述べてきたが、その教育理念に基づいた幼児のリズム指導を考えてみたい。

1 領域「音楽リズム」の解釈の仕方

現行の幼稚園教育要領(昭和39, 3, 23文部省告示)には、幼稚園教育の目標を達成するための指導の望ましいねらいとして、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六つの領域が示されている。これらは、それぞれ、全く別個に指導されるものではなく、相互に密接な関連があり、幼児の具体的、総合的な経験や活動を通して達成されるべきものであること、そして、幼稚園教育の特質に基づき、各領域は、小学校における各教科とその性格が異なるものである、と示されている。

ここで、6領域の一つである「音楽リズム」の^{註5)}とらえを明らかにしておきたい。

「音楽リズム」という言葉は、曖昧なとらえのまま、使用しがちであるが、この言葉は、小・中・高校では使われず、幼稚園のみで使われている言葉である。

では、なぜ、幼稚園では「音楽」という言葉を重ねて、「音楽リズム」という言葉を使っているのか、という疑問が出てくる。

言葉の解釈からすると、「音楽リズム」の「リズム」という言葉は、音楽の3要素(メロディー、ハーモニー、リズム)の一分野としてのものであると受けとれる。しかし、この「リズム」という言葉は、例えば、子どもの歌や遊びの中に、自然にあらわれる、いわゆる「動きのリズム」という意味に解釈しておきたい。

幼児の発達の特徴の一つとして、感覚が未分化であるということがあげられる。したがって、その表現は、さまざまな感覚が入り混じることがあり、音楽と動きの表現においても、未分化な状態であられる。

例えば、音楽を聴いて、全身で反応しようしたり、遊びの中に、無意識に、動きを伴う歌を取り入れて活動している場合などに見られる。

このように、幼児にとって、音楽と動きは、お互いが誘発し合うものであり、切り離してとらえたり、指導することは、困難であるため、このような解釈が、適当と思われる。

2 領域「音楽リズム」におけるリズム指導のあり方

(1) オルフの教育理念を生かした指導

幼稚園教育要領には、領域「音楽リズム」に属するねらいとして、次の26事項および、それらを整理した4事項があげられている。

1 のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。

(1) いろいろな歌を歌うことを楽しむ。

(2) みんなといっしょに喜んで歌い、ひとり

C. オルフの音楽教育理念に基づく幼児のリズム指導について

でも歌える。

- (3) すなおな声、はっきりしたことばで音程やリズムに気をつけて歌う。
- (4) カスタネット、タンブリン、その他の楽器に親しむ。
- (5) 曲の速度や強弱に気をつけて楽器をひく。
- (6) みんなといっしょに喜んで楽器をひく。
- (7) 役割を分担したり、交替したりして楽器をひく。
- (8) 楽器をたいせつに扱う。

2 のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。

- (1) のびのびと歩いたり、走ったり、とんだりなどして、リズムカルな動きを楽しむ。
- (2) 手を打ったり、楽器をひいたりしながら、リズムカルな動きをする。
- (3) 曲に合わせて歩いたり、走ったり、とんだりなどする。
- (4) 歌や曲をからだの動きで表現する。
- (5) 動物や乗り物などの動きをまねて、からだで表現する。
- (6) リズムカルな集団遊びを楽しむ。
- (7) 友だちのリズムカルな動きを見て楽しむ。

3 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。

- (1) みんなといっしょに喜んで音楽を聞く。
- (2) 静かに音楽を聞く。
- (3) いろいろのすぐれた音楽に親しむ。
- (4) 友だちの歌や演奏などを聞く。
- (5) 音楽や曲の感じがわかる。
- (6) 日常生活において音楽に親しむ。

4 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。

- (1) 短い旋律を即興的に歌う。
- (2) 知っている旋律に自由にことばをつけて歌う。
- (3) 楽器を感じたままひく。

(4) 感じたこと、考えたことを、自由にからだで表現する。

(5) 友だちといっしょに、感じたこと考えたことをくふうして歌や楽器やからだで表現する。

上記のねらいを達成するための指導にあたっては、幼稚園教育要領第1章「総則」にかかげられた基本方針の一つである「のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにするようにすること。」と、深い関連を持っている。

そこで、幼児の創造性を伸ばすリズム指導の方法について考えてみよう。

まず、「のびのびと表現の喜びを味わう」や、「感じたこと、考えたことを、自由に、音や動きに表現する」といったねらいは、非常に柔軟性に富んだ、理想的な文章表現がなされている。したがって、教師は、教材の選定や指導法の工夫をしなければならぬとともに、その工夫によって、幼児が生きた音楽活動を経験することが可能かどうかにかかわってくるのである。

リズム (Rhythmus) という言葉は、ギリシア語の rheein (流れる) に由来し、字義どおりに解釈すると、流れるもの、つまり、不断に継続的なものといえることができる。リズムは、音楽の中で、「時間的な流れを秩序づけるもの」として、また、動きの中では、「時間の流れに空間の加わったものを秩序づけるもの」として、最も大切な要素である。

幼児の生活は、遊び続け、動き続け、疲れたら眠るという、一つのリズムの流れの中にある。したがって、幼児のリズム指導においては、子どもの本質である遊びの実態を把握し、あくまでも、子どもの持っている自分のリズムから、音楽的要素を引き出してやるという姿勢が大切である。リズムの形や拍子などを、大人の側から一方的に「覚えさせる」ことではなく、「感じさせる」指導が必要なのである。

以上のことがらを考えた時、オルフの教育理念

には、非常に示唆に富んだ内容が含まれているといえる。つまり、幼児の中から無理なくリズム感を引き出し、それを創造的な表現に発展させるための理念に基づいた方法が工夫されているのである。

創造性を伸ばす音楽活動としてのリズム指導を考える時、最も重視したいのが、即興演奏やアンサンブルである。

幼児に自由な表現や演奏をさせる場合には、その表現をするてだてを教えてやらなければならない。つまり、無から有を生み出すのではなく、過去の経験の中にある、ある形を、自分自身の形として作りかえていくことが、創造するという事である。

オルフの教育理念による指導では、「言葉」や「動き」を伴った遊びの中から、模倣させることを出発点とし、問答遊びを通して、即興的なリズム表現をする過程が見られる。子どもの興味や関心など、多面的なとらえの中から、即興性、創造性につながるリズム指導を考えているのである。

また、即興表現の指導において、留意しなければならないのは、「心の解放」抜きには、効果的な指導は望めないということである。アンサンブルの中に、即興演奏を入れる場合には、オスティナート伴奏として反復演奏の伴奏の支えのもとに行なうと、安定感を持って自分の表現がしやすくなるのである。また、アンサンブルを行なうことにより、連帯意識とともに、個人の大切さ、つまり、自分の演奏の大切さを感じることができるようになる。

(2) 幼稚園における実践研究の例

我が国にオルフの音楽教育が紹介されてから、幼稚園教育の中では、その教育理念がどのように実践に移されてきているであろうか。20年に渡り、実践研究が行われている幼稚園の歩みを考察しながら、オルフの教育理念を、幼稚園教育の場において、どのように位置づけ、実践化していっ

たらよいか、考えてみたい。

武蔵野音楽大学付属幼稚園（第一、第二、第三、武蔵野の4園）では、オルフの教育理念による音楽の基礎指導を「音楽リズム」の領域に取り入れることに関心を持ち、その実践研究を進めて今日に至っている。

それぞれの園の教師は、その研修方法として、オルフ専門の講師から、実技および指導法についての指導を受け、日常の保育での実践から生じた疑問や反省は、次の研修会の機会に講師の指導を受ける、といった方法をとっている。

また、その実践研究の経過は、昭和39年のオルフ研究全国大会をはじめとして、昭和40年から59年に至るまでに、計11回のオルフ研究発表会において発表がなされている。

ここでは、第一、第二幼稚園の研究発表資料をもとに、幼稚園でのオルフの教育理念のとらえ方とその実践を、扱った題材や指導目標の面から考察してみた。

昭和39年から昭和59年までの研究保育における「題材」および「目標」に見られる変化を追ってみると、3期に分けることが可能であると思われる。

〔第1期〕昭和39年～昭和44年

オルフの教育理念を実践に取り入れた初期であり、教師自身も、手さぐり状態の中で研究を進めている。題材としては、日本版「子どものための音楽I a, I b」の使用から始めており、楽器による指導に重点が置かれている。この間に行われた研究保育16クラスの中で、題材に、曲名そのものが使われているクラスが12クラス（75%）で、残りは、活動内容となっている。また、目標の中に、「リズム感の指導」および、それに関連した言葉が含まれているものが、12クラス（75%）見られる。

〔第2期〕昭和45年～昭和49年

音楽の基礎指導ということに重点が置かれている。そのため、ことばや動きによる即興表現の指

導を重視している。題材の中では、ことばの遊びやシュプレヒコール、身体活動を通しての表現に関するものが全体を占め、それらの活動を通し、音楽的な感覚を伸ばし、創造的意欲を高めることが目標とされている。

〔第3期〕昭和50年～昭和59年

保育の中で、特別なものとなりがちなオルフの指導を、日常保育における既存の活動と結びつけ、定着させるための指導が行なわれている。そして、そこから発展し、オルフの指導は、「音楽リズム」の領域のみにとどまらず、6領域のあり方や内容的な面での結びつきを考えた目標が設定されている。

以上、20年に渡る実践の経過をたどってみると、そこに、オルフの音楽教育理念の奥深さ、幅広さを見ることができる。

オルフの音楽教育理念による「エレメンタールな音楽」は、音楽単独ではありえず、「言葉」や「動作」を伴うものであることは先に述べたが、幼児の音楽指導においても、「言葉」や「動作」は、切り離すことができないものであり、オルフの重視している幼児期のリズム指導にとっても、同様のことが言える。

(3) 指導過程計画

指導計画の例を、ここに紹介しよう。(表2)

Ⅲ リズム指導の実践についての基本的な考え方

A. 「言葉」によるリズム指導

第1章で述べたように、オルフは、「音楽の練習は、言葉の練習から始めるべきである」と言っている。「言葉」は、リズム指導を行う上で、最も身近で具体性を持った素材である。この素材の、音楽表現における取り扱いについて述べてみたい。

「言葉」本来の役割は、意志や感情の表現と伝

達にある。「言葉」と「音楽」は、その表現の原理においては、同一であるといえる。

特に、身近なことばを用いてのリズム指導は、その指導内容や方法を工夫することにより、幼児の発達段階に即し、日常生活と関連を持たせることができるので、抵抗を少なくし、「言葉あそび」という形の中で、楽しく行うことができる。

次に、その指導の過程に沿って、それらの指導目的と注意事項をあげてみたい。

① 「言葉」の模倣

聴覚的な模倣による指導は、幼児期の子どもの指導によく見られる方法であり、音韻を誇張して、ゆっくり、はっきり、フレーズを考えて練習する。

② 「言葉」による問答あそび

日常、行っている、「言葉」で問を出し、答えるという方法を、即興表現として意識付けるのである。そこから、子どもの持っている素朴な音楽的要素を引き出し、リズム感やフレーズ感を身につけさせる。

③ 「言葉」による Rond あそび

問答あそびの発展したもので、クラス全員が、「言葉」による即興表現を使って参加できるところが、おもしろい。

④ 「言葉」による Canon あそび

クラス全員が一定のリズムで言葉を唱えられるようになったら、1小節おくれ、2小節おくれなどのCanon練習を行ってみる。また、3部、4部のCanonにしてみるのも、楽しい。

⑤ 簡単なシュプレヒコール

「言葉」による練習の発展の最後として、「言葉」によるコーラスが考えられる。詩を用いて、全員で声をそろえて唱え、斉唱からCanonへ、また、オスティナート、打楽器の伴奏などを加えて発展させることができる。

B. 「動き」によるリズム指導

子どもの生活は、ほとんどが、遊びで占められている。「動き」のリズム指導を行う際には、こ

の、遊びと結びついた自然な身体の「動き」に着目し、それを、音楽と結びついた「動き」として、意識化させることが大切である。そのことを、最も良く表わしているオルフの言葉をあげてみよう。

「この間、上手に踊った子がいましたけれども、私のいう踊りというのは必ずしもああいうものを言っているわけではないのです。もっとプリミティブなものでいいのです。だれでもが、簡単にやれる素朴な子どもっぽい踊りがあるはずです。踊りというより遊びに近いもの——たとえば鬼ごっこ、めかくしおに、じゃんけん、石けりの註7)ようなものから発展したものでいいわけです。」

次に、その指導目的と注意事項をあげてみたい。

(1) 基本的な「動き」

まず、「静止」している状態から、普通の歩き方、そして、無駄のない美しい歩き方へと練習する。前後、左右に歩いてみる。後に歩く練習をするうち、いままでになかった勘がはたらくようになり、人の気配に気付いて歩くことができるようになる。

リズムの変化に合わせて歩く場合は、次の拍を予想しながら歩けるようにする。また、いろいろな拍子に合わせて歩く場合は、その拍子に合った言葉を唱えながら練習すると、効果的である。

これらの練習方法は、走ったり、スキップをする時にも応用できる。

(2) 形式や情景を考えた「動き」

① 模倣

鏡の中にうつった形と同じように、相手の動きを同時に模倣するものと、手本になっている者の動きと同じ動きを行う場合がある。簡単な動きから、徐々に複雑な動きを練習する。

② 問答

問に対して、よく合う答を即興的な動きで表現する。即座に答として動けるようにし、徐々に形式感を身につけていく。

③ 三部形式

$[A]-[B]-[A]$ の形で、動きを考える。 $[A]$ と $[B]$ 2グループに分かれてもよいし、 $[B]$ の部分を一人が行ってもよい。

④ ロンド形式

三部形式からの発展で、テーマ以外の部分は、一人ずつが即興的に動くと、全員の動きをみることができる。

⑤ カノン

一人ずつ、または、グループに分かれて、1小節おくれ、2小節おくれなどで動いてみる。あまり高度な動きでなく、簡単な動きで行ったほうがよい。

その他、動物や乗り物の動きの模倣（実際にあるものの模倣）、楽器を演奏しながらの動き、動きのオスティナート作りなど、応用範囲は広い。

おわりに

幼稚園教育の中にオルフの音楽教育理念を位置づける場合に、「音楽リズム」の領域が中心になることは言うまでもない。しかし、これは、決して一つの枠の中へはめ込んだ特殊な指導を考えるのではない。一步、視野を広げてみると、他の領域や幼児の日常生活、そして、遊びの中に、その指導場面や材料が豊富に含まれており、それらを多面的、総合的に取り入れることが可能である。

したがって、オルフの根本精神を理解するための正しい研究と指導を行うのであれば、幼稚園教育において、オルフの教育理念に基づいたリズム指導は、より柔軟性を持たせ、効果的に発展させることが可能である。

本研究は、昭和60年度武蔵野音楽大学への内地留学の際に行なわれたものである。

本論文作成にあたり、多くの有益な助言と示唆を頂きました、武蔵野音楽大学の広瀬鉄雄教授に深く感謝いたします。

また、貴重な研究会発表資料を提供くださいました武蔵野音楽大学附属幼稚園の先生方、日頃の実践を見学させていただきました同大学附属音楽教室の先生方に、深く感謝いたします。

註

- 1) これらの教育用楽器の製作 (1930年) にあたり、オルフは、ミュンヘンの楽器製造者カール・メントラーから多くの助言を受けている。
- 2) インドのガムラン音楽で用いられるガンバン (gambang) などからヒントを得ている。
- 3) Carl Orff, Gunild Keetmann : ORFF-SCHULWERK, Schott, Mainz. 1, Zweiter Teil(1954) 「Am Beginn aller musikalischen Übung, der rhythmischen wie der melodischen, steht die Sprechübung.」
- 4) 座談会 カール・オルフ氏を囲んで——子どものための音楽について——音楽教育 小学版 音楽之友社 東京 46ページ (1962, 12)
- 5) 保育所保育指針には、「音楽」という言葉が使われているが、これも、「音楽リズム」と同様の扱いとしてとらえることができると思われる。
- 6) L. クラーゲス 杉浦実訳：リズムの本質、みすず書房 東京 28ページ (1983)
- 7) 註4) の45ページ

参考文献

- 1) Carl Orff, Gunild Keetmann : ORFF-SCHULWERK, Schott, Mainz, 1—5, (1954)
- 2) 広瀬鉄雄：カール・オルフのシュールヴェルクについての一考察 武蔵野音楽大学研究紀要Ⅲ(1969)
- 3) 標準音楽辞典、音楽之友社 東京 (1981)
- 4) ウィルヘルム・ケラー／フリッツ・ロイシュ 橋本清司訳註：オルフ 子どものための音楽 解説 音楽之友社 東京 (1983)
- 5) 星野圭朗：オルフ・シュールベルク理論とその実際 全音楽譜出版社 東京 (1979)
- 6) 花井清：オルフによる音楽教育Ⅰ 言葉の指導 東洋館出版社 東京 (1979)
- 7) 川本久雄／花井清：オルフによる音楽教育 動きの指導 東洋館出版社 東京 (1978)
- 8) 武蔵野音楽大学付属第一幼稚園：昭和51年度研究指定園公開保育資料 (1977)
- 9) 武蔵野音楽大学付属第一幼稚園：昭和59年度東私幼公開保育資料 (1984)
- 10) 武蔵野音楽大学付属幼稚園：カール・オルフの考えによる幼児教育における音楽の基礎指導 研究発表資料 昭和42年～昭和48年 その1 (1973)
- 11) 邦正美：動きのリズム、万有社 東京 (1954)
- 12) 文部省：幼稚園教育要領、フレーベル館 東京 (1964)
- 13) 坂本彦太郎：幼稚園教育要領解説、フレーベル館 東京 (1984)
- 14) 文部省：幼稚園教育指導書 領域編 音楽リズム、チャイルド本社 東京 (1971)
- 15) 厚生省児童家庭局：保育所保育指針、フレーベル館、東京 (1985)